

この文章を書いている今でさえ、私の声は枯れている。

「今でさえ、」という表現をするのが、5月14日から数日たった今でさえ、という意味である。5月14日、安倍政権は戦争立法を閣議決定した。当日、19時からの安倍首相の会見における、「戦争法案は無責任なレッテル貼り」「アメリカの戦争に巻き込まれることは絶対ない」の発言に対して、首相官邸前で行われていた官邸前抗議に多くの人に参加した。私は、数時間ほど大声を張り上げていたため、声は枯れ、拡声器を握りしめる右腕や右肩の鈍い痛みがはしり、無力感が残った。

そこで思ったのは2つである。第一に、権力者が平然とウソをつくことのおそろしさである。戦争法案を平和法案であるといい、戦争に巻き込まれる可能性を自ら高めておきながら戦争に巻き込まれることはあり得ないという。想起せざるをえないのはジョージ=オーウェル『1984』に出てきたニュースピーク、つまり全体主義国家における用語法を逆転して用いる言語であり、悲しまざるをえないのは私たちがその物語をいつかあった恐ろしいことでなく、現在の政権の振る舞いを見て思い出すことにある。

第二に、抗議のコールである。2013年12月より続く特定秘密保護法制定反対、集団的自衛権行使閣議決定容認反対、特定秘密保護法施行反対、それらの延長線上に今回を位置づけるとすると、おそらくはじめて「日本を守れ」というコールを聞いた。一見、それこそ自衛隊のスローガンのような「日本を守れ」という表現に違和感を抱くものの、そのコールは以下のように続く。「安倍晋三から日本を守れ」、と。もはや安倍政権の反動攻勢は、保守—革新という一定の枠組みを超えて、民主主義を破壊する段階に入っていることに、改めて危機感を感じざるを得ない。

思えば大学院に入ってから、政治と言えば安倍政権への屈辱しか残っていない。昨年、私は自治会活動に関わっていたので、ささやかであるが学校教育法反対の運動を院生で組織し、自分たちで学校教育法改定の問題点を議論し、反対声明をまとめ、文部科学委員会／文教科学委員会所属の国会議員に電話がけ／ファックスがけを行った。今年は、東大の仲間と新学事暦の導入や教育改革を考える会を立ち上げ、アンケートを学内関係者全員を対象にとって実態を把握し、現行のトップダウン型の改革について考えるイベントも行った。もちろん今回の主旨である軍学共同反対についても、こうしたトップダウン型／非民主主義的／非平和的方向へと大学や学問を導くものとして、反対している。

字数がなくなってきたので、最後に理念の重要性に触れておきたい。大学は university という英語であるが、この言語はラテン語で universitas、ひとつになったもの／ひとつの目的を持つ共同体、という意味だそうである。ここにおける目的とは、真理追求であろう。つまり大学は何より、真理追求の場でなければならない。学問は、性別や人種や地位や身分や研究領域を超えて、誰にとっても享受できるものでなければならない。そこに権力からの介入や、軍事大国化への途を開くという選択肢は許されないはずである。

この文章を書いている今でさえ、私の声は枯れている。しかし、学問の自治と平和への思いは、絶対に枯れることはない。ここ東京大学から、いまこの場から、学問の自由を強くうたおうではありませんか。大学の自治を高らかに宣言しようではありませんか。誰もが学問を享受できる場を、ここから作り上げようではありませんか。ともにがんばりましょう。